

「良かれと思ってする行為」とその問題

— 小学生児童の語りの分析 —

“Doing what is right” and Issues with that Approach
— An Analysis of Elementary School Children’s Narratives —

村井 あかり* 岡本 吉生**
Akari MURAI Yoshio OKAMOTO

要約 他者への善意を動機とする行為が、却って問題やトラブルを発生させてしまうという逆説的な場面に着目する。学校生活場面についての小学生児童の語りから、児童がどのような背景文脈の中で「良かれと思ってする行為」を行うのかという過程を事例的に検討する。また行為の動機を推測し、「良かれと思ってする行為」とその問題について明らかにすることを目的とする。児童の語りから事例を作成し、そのうちの1事例について取り上げ、分析を行った。「良かれと思ってする行為」の動機には善意だけでなく、悪意や欲求も併存する可能性があることや、善意が行為を正当化し加害者意識を弱めることなどが明らかになった。また、「良かれと思ってする行為」がトラブルの原因となる可能性が示唆された。

キーワード：向社会的行動, 善意, 語りの分析, 小学生

Abstract This study focused on the paradoxical situation where acts motivated by good intentions towards others cause trouble. Based on the narratives of elementary school children in school scenarios, this study examined cases of the process of "doing what is right" in certain contexts. The purpose of this study was to surmise the motive behind those actions, to analyze "doing what is right," and issues with that approach. Cases were devised based on children’s narratives, and one case was considered and analyzed. Results indicated that motives for "doing what is right" may include good intentions as well as malice and want and that good intentions justify the action and reduce the awareness of the actor. In addition, results suggested that "doing what is right" can lead to trouble.

Key words : Prosocial behavior, Good intentions, An analysis of narratives, Elementary school students,

問題と目的

社会では殺人事件や虐待事件、いじめといった事件が起きている。事件化された出来事に対して世の中は、表面化している「殺人」などの行動に注目し、その次に動機を取り上げる。事件の動機には報復や利欲目的など様々ある¹が、中には「他の人に危害が及ぶかもしれないと思った」という殺人の動機や

「子どものためのしつけど」という主張の虐待事件もある。こうした動機は自身の欲求を善意にすり替えているだけなのか、または加害者にとっての善意が他者から見たときに悪意だったのか。人は表面化している行動から物事を捉えやすく、数ある動機の中に善意というキーワードも埋もれているが、他者のために「良かれと思って」行動する「善意」は実際のところとても厄介なものではないだろうか。

日常生活の中で、相手のためになると思ってしたことが相手に良いと感じてもらえないことがあるだろう。または相手には良いと感じてもらえたとしても、周囲から悪い行いだと評価されることもある。

* 家政学研究科児童学専攻
Department of Child Studies

** 児童学科
Division of Child Studies

このように他者のために「良かれと思ってする行為」という切り口で見たとき、個人の日常レベルから社会問題となる事件まで、問題・トラブルはそこかしこで起きているといえる。表面化された行動のみに目を向け、その背景にある状況や人の心の動きを考えなければ、他者のための「良い」行動として片付けられ、現実には起こり得る問題を見落としてしまうことになるのではないかと。他者への善意を動機とするこうした行動の問題には複雑な背景があるかもしれない、それをどう考えていくべきだろうか。

一般に、他者の利益となる行動は「向社会的行動」と言われている²。これまで、周辺環境などの状況要因や動機づけなど様々な方向から幅広い対象で向社会的行動に関する研究が行われている³。特に子どもを対象にし、その教育的な働きかけやしつけについての、向社会的な行動を推進する目的をもった研究は数多くみられる³。では向社会的行動を身につけた人は、果たして何も問題を起こさないのだろうか。現実の社会では必ずしもそうではないのではという疑問が、本研究のテーマである。ある他者への向社会的行動が社会のルールによって非難されることや、別の他者を傷つける結果となることもある。例えば、他者のためにつく「思いやりの嘘⁴ (White lie)」は対象である他者にとっては嘘をつく行為が思いやりであり、向社会的側面をもつが、別の他者にとっては騙しとなることもあり向社会的行動として機能しないことがある。また、嘘をつくという行為そのものが非道徳的であると評価されることも少なくない。

このように、二者関係の間だけで見たときの向社会的行動は、第三者が加わることで向社会的行動とはいえない意味が与えられることがあり、それこそが現実社会で種々の問題となって発生していると私は考える。本研究では、このような観点から、向社会的行動が向社会的に働かない場面、つまり他者のために良かれと思ってする行為が却って問題を発生させてしまうという、いわば逆説的な場面について実証的に考察したい。ここでの「問題」とは、当事者だけでは解決できず、教師や親などが介入する必要のある事柄が発生することを指す。

本研究では、「良かれと思ってする行為」が行われる学校生活場面での女子児童の主観に焦点を当て、児童がどのような背景文脈の中で「良かれと思ってする行為」を行うのかという過程を事例的に検討す

る。また行為の動機を推測し、「良かれと思ってする行為」が引き起こす可能性のある「問題」について明らかにすることを目的とする。

こうした社会の問題の起源は、すでに子ども時代から生じている可能性がある。人間関係の問題の本質は幼いころにその原型を見ることができる。研究方法としては、小学生の学校生活場面において、「良かれと思ってする行為」とそれが引き起こす別の問題場面を明らかにし、その問題発生過程や背景を分析する。

本研究で用いる言葉の定義を Table1 に示す。

Table 1 The definition of a word

用語	定義
良かれと思ってする行為	他者の利益を目的とする動機を含む行為
行為者	「良かれと思ってする行為」をする人物
行為の受け手	行為者の「良かれと思ってする行為」を受ける人物
第三者	「良かれと思ってする行為」が行われる場面において、直接の当事者ではないが、行為者の行為に何らかの影響を与える人物やその人物の考え
援助の対象	援助行動としての向社会的行動を向ける相手
被害者	行為者の「良かれと思ってする行為」によって何らかの被害を受ける人物
向社会的行動 (prosocial behavior)	その行動の動機は不明であるにしても表面上意図的で自発的な他者の利益となる行動 ²⁾

方法

(1) 調査方法

(1-1) 対象

都内小学校に通う、小学4年生～小学5年生（※調査期間中に学年をまたぐ）女子児童1名を対象とした。

(1-2) 調査方法

非構造化面接を用いた。対象者には、研究の目的を明かさず、「学校であった出来事を話してほしい」という質問にとどめた。1回あたり平均約15分であり、計38回実施した。事前に対象者本人及び保護者に、ICレコーダーによる録音の許可、また論

文掲載の承諾を得て調査を行った。

(2) 分析方法

(2-1)

対象者には研究の目的を明かしていないため、得られた音声データの中には、研究上意味のあるものもあれば、まったく意味のないものもある。よって、「良かれと認めてする行為」だと推測されるものを選んで逐語録にした。

(2-2)

逐語録から事例を作成した。なお、登場する児童の名前や施設名はすべて仮名であり、内容を損なわない程度に匿名化を行った。事例は対象者の逐語録をもとに、時系列に沿ってまとめた。つまり、対象者が学校で見聞きた出来事を事例化したものであり、出来事に関して、対象者が推測したものは入っておらず、また、事例には調査者が推測したものも含まれていない。

作成した事例は、対象者の視点で語られている「主観的な出来事⁵」であることに留意したい。語られた内容が客観的事実であるかどうかには重点を置かず、「良かれと認めてする行為」が行われる場にいる対象者の主観に焦点を当てた。

(2-3)

作成した事例のうち、本論文では1事例を対象として分析を行った。事例を場面ごとに整理し、「良かれと認めてする行為」だと推測される行為を抽出した。抽出した「良かれと認めてする行為」を分析の視点 (Table2) に則り、分析した。その際、行為の動機について考察し、「良かれと認めてする行為」の妥当性について検証した。

事例と考察

「良かれと認めてする行為」が引き起こす「問題」発生の過程や背景について、非構造化面接から作成した事例を挙げて考察する。本論文では、文脈がより重要になると考え、4つ以上の場面がある「仲間はずれにする」の事例を取り上げる。

(1) 事例の概要

本事例に登場するのは、小学4年生の6人の女子児童である。女子児童 A, B, C, D, E, K はクラスメイトであり、そのうち A, B, C, D, E は休み時間に一緒に遊ぶ仲の良い友人である。K には特定の友人がいない。

また、本事例は5つに場面分けをし、6つの「良かれと認めてする行為」を抽出した。事例中の下線は「良かれと認めてする行為」だと推測される行為を示す。

u>

(2) 第0場面：Aが、ABCDEとKの関係を整理する

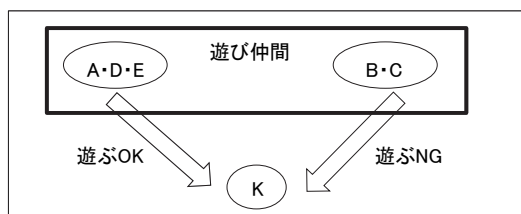
(2-1) 事例

A, B, C, D, E は、休み時間に一緒に遊ぶ仲の良い遊び仲間であり、遊ぼうという声かけをせずとも、休み時間には集まって遊ぶ。ただし、K との関係性がそれぞれ異なる。D, E は K について「遊ぶのはまあいい」と A に話すが、B, C は K のことを「話すのも遊ぶのも嫌だ」と話す。A は K のことを「遊ぶのはいいと思う」と思っている。A, B, C, D, E と K の関係性を Figure 1 に示す。

Table 2 Perspective of analysis

用語	内容
行為者／行為の受け手／第三者	人物
援助の対象／被害者	人物またはモノ
行為名／行為内容	行為者の行為の内容
困りの状況	行為者が認知した援助の対象が困っている状況
被害の状況	推測される被害者の被害の状況
援助の対象／被害者との関係性	行為者と、援助の対象／被害者との関係性

Fig. 1 Relationship between ABCDE and K

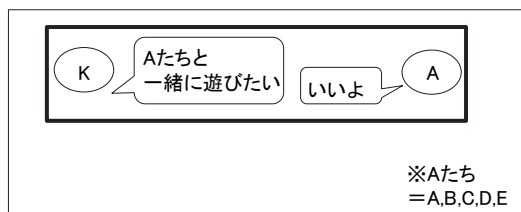


(3) 第1場面：KがAに話しかける

(3-1) 事例：行為1

KがAに「Aたちと一緒に遊びたい。」と話しかける。「Aたち」とは、Aと、Aがいつも休み時間に遊んでいるB、C、D、Eを指す。AはKに「いいよ。」と返事をする（行為1）。(Figure 2)

Fig. 2 Act 1 in Scenario 1



(3-2) 分析：行為1

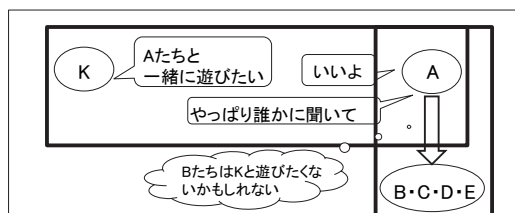
Kは休み時間に一緒に遊ぶ相手がいない、とAはKの普段の様子から認識している。つまりAは、遊ぶ相手がいないことをKの「困りの状況」として認識している。KはAと一緒に遊びたいと言うが、このKの行為は、Kが「困りの状況」を解決するための行為なのか、純粹に遊びたいというKの欲求なのかは不明である。ここでAは、Kが「困りの状況」にあることを認識したうえで、「いいよ。」と返事をして、一緒に遊ぶことを許可する内容の発言をする。ここではKに「いいよ。」と返事をするAの行為が、Kにとっての「良かれと思ってる行為」だと考える。

(3-3) 事例：行為2

KはAに「Aたちと一緒に遊びたい。」と言い、AはKに「いいよ。」と返事をする。返事をした後、すぐに「やっぱり誰かに聞いて。」とKに言う（行為2）。ここでの「誰か」とはAと一緒に遊ぶB、C、D、Eらのことを指している。Aは自分がよくても、一緒に遊ぶBら「みんな」がKと遊んでもよいか「わかんない」と考え、Kに「誰かに聞いて」

と言う。(Figure 3)

Fig. 3 Act 2 in Scenario 1



(3-4) 分析：行為2

Aは自分がよくても、一緒に遊ぶBら「みんな」がKと遊んでもよいか「わかんない」と考え、Kに「誰かに聞いて」と発言したと調査者に語っている。Aは、B、CとKの関係性を把握している。つまり、B、CはKが嫌いであるため、Kと遊ぶことになってはBたちが「困る」と考えたといえる。Aは、一度Kに「遊んでもよい」と返事をしたが、BたちとKの関係性に思い至り、「いいよ。」という発言を撤回し、返事を保留にする。このAの行為が、Bたちにとっての「良かれと思ってる行為」だと考える。

(3-5) 考察

なぜKを交えて遊ぶことができなかったのか

「一緒に遊びたい。」と言ったKを交えて、Aたちがすんなりと遊ぶことができなかった理由は何か。AはKに「いいよ。」という返事をした後、Bたちを思い浮かべ、BたちはKと遊びたくないかもしれないと考えている。つまり、Aの遊び仲間であるB、CがKを嫌いである、という関係性が影響しているといえる。「一緒に遊びたい。」と言ったKを交えて遊ぶことがKにとっての向社会的行動であるとすれば、関係性が前提条件として存在するとき、向社会的行動は阻止されるといえる。

AはなぜKに「やっぱり誰かに聞いて」と言ったのか

AはKに「一緒に遊びたい。」と話しかけられ、「いいよ。」と返事をするが、「やっぱり誰かに聞いて。」と言い直す。Kに「やっぱり誰かに聞いて。」と言わずとも、Bたちに「Kと一緒に遊ぶことになった」と伝えることや、A自身がBたちに確認を取るなどの行為を選択することもできたのではないか。

なぜ、A は K に「やっぱり誰かに聞いて。」と言ったのだろうか。

A は自分がよくても、一緒に遊ぶ B ら「みんな」が K と遊んでもよいか「わかんない」と考え、K に「誰かに聞いて」と発言したと調査者に語っている。つまり、K への行為の動機を「B たちのため」だと説明している。しかし前述のとおり、他にも K への行為を選択する余地はあったはずである。他の動機も検討可能であると考ええる。

まず、A の「やっぱり」という発言、つまり「いいよ。」という返事を撤回した行為から、K のことが嫌いな B たちへの善意を考える。B たちは遊びたくないかもしれないからという A の発言からも考えられる。

次に、返事を撤回し B たちに確認を取ろうとした行為である。この行為からは、B たちへの善意だけでなく、勝手に K に返事をしてしまったことで B たちに責められたくないという A の欲求も考えられる。また、K を遊びに加えるかどうかを決める責任を他の人へ委ねたいという欲求も考えることができる。

最後に、A 自身ではなく、K に、B たちへ確認を取らせようとする行為である。関係性の部分で省略してしまったが、K は、A とは話すことができるが B たちには声をかけにくい、という関係性がある。A もそれを認識している。わざわざ A に声を掛けていたのかもしれない K が、B たちに声をかけなくてはならないという「困りの状況」に置かれることを A も知っており、意地悪な返答ともいえることから、K に対する悪意があったとも考えられる。

以上より、「良かれと思ってる行為」だと推測される行為には、善意だけでなく、悪意や欲求が併存する可能性があると考えられる。

(4) 第 2 場面：K について ABCDE が集まって話をする

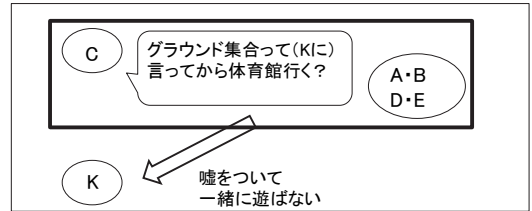
(4-1) 事例：行為 3、行為 4

休み時間になる前に、K 以外の A、B、C、D、E 5 人は集まって話をする。場面 1 において A が K に「誰かに聞いて」と返事をした後、K が B たちに確認したのかどうかは不明である。A たち 5 人は、K が「A たちと一緒に遊びたい。」と言ったことについて話し合う。

K を嫌いな C は、K が一緒に遊ぶことに対して「えー」と言う。A たちは「どうする？」と言い合

う。C が「グラウンド集合って (K に) 言ってから体育館行く?」と A たちに言う (行為 3)。K に伝えた遊び場所とは別の場所で遊ぶ、つまり K に嘘をつくのはどうかと C は提案する。A たちは C の提案に賛同し体育館で遊ぶ (行為 4)。A たちのうちの誰かが、遊ぶ前に、K にグラウンドで遊ぶことにしたと伝える。(Figure 4)

Fig. 4 The act in Scenario 2



(4-2) 分析：行為 3、行為 4

第 2 場面において「良かれと思ってる行為」は、2 つ考えられる。K と遊ばない方法を提案する C の行為と、二つ目は C の提案に賛同し、K を仲間はずれにする A たちの行為である。それぞれ、仲間内のための行為だと推測する。C は、一緒に遊ぶ A たちも自身と同じように K が嫌いであり、K とは一緒に遊びたくないだろうと考えている。A たちにとって K と遊ぶという「困りの状況」にならないよう、提案したといえる。

それに対し、A たちは K を嫌いだと思われる他の人のため、あるいは遊び仲間全員の意向をそろえるために、C の提案に賛同したと考えられる。A、D、E は K と遊ぶことに対し否定的でないため、A たち全員が K と遊びたくないために K に嘘をついた、とは考えにくい。

(4-3) 考察

なぜ A たちは C の提案に反対しなかったのか

C の提案に賛同した A たちとは、C 以外の A、B、D、E である。A たちの中に、K を仲間外れにしようという C の提案に対して反対しなかったの一人もいない。K と遊びたくない、C に嫌われたくないなど、C の提案に賛同した理由はいくつか考えられる。仮に C の提案に賛同したくない、K がかわいそうだから仲間はずれに出来ないと少しでも思う人物がいたとする。しかし自分以外の 4 人が、K に嘘をついて仲間外れにすることをよしとしているため

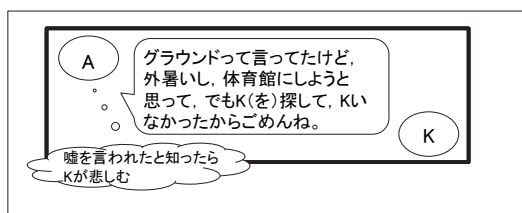
に、それを覆せないという状況になっている可能性がある。嫌われるのが怖く、間違っていると言い出せないという話ではなく、自分以外の4人全員が選択しているものを自身も最善だと思ってしまうということである。ここでは友達4人だが、集団という力がその場のルールを決定してしまうことがあると考える。

(5) 第3場面：AがKを捜しにいき声をかける

(5-1) 事例：行為5

体育館でBたちと遊んでいたAは、嘘をついて仲間外れにしてしまったKのことが気になる。CにKがかわいそうではないかと話すが、CはKを連れてくることに反対する。Aは一人で、Bたちと遊んでいた体育館を出て、Kを捜しに行く。Kを見つけるが、Kに嘘の場所を伝えたとはいわず、場所を変更したがKが見つからなかったと嘘をつく(行為5)。(Figure 5)

Fig. 5 The act in Scenario 3



(5-2) 分析：行為5

第3場面における「良かれと思ってする行為」は、Kに嘘の場所を伝えたとはいわず、場所を変更したがKが見つからなかったと嘘をついたAの行為である。Aはこの行為の理由を、Kが嘘を言われたと知ったら悲しむからと調査者に語っている。本当は体育館が遊び場所だったにもかかわらず、グラウンドが遊び場所だと嘘をつかれ仲間外れにされた事実を知ってKが傷つくというKの「困りの状況」をAは考える。Kが傷つく状況を避けるための、Aの嘘をつくという行為であり、Kのための、Aの「良かれと思ってする行為」だといえる。

(5-3) 考察

善意がAにもたらすものは何か

Aは、Kに嘘の場所を伝えたとはいわず、場所を変更したがKが見つからなかったと嘘をつく。Aはこの行為の理由を、Kを悲しませないためであると

調査者に語っている。Kに嘘をつくというAの行為は、A自身がKを仲間外れにしたことを隠す行為だといえるが、AはこれをKへの善意から行ったと認識しているといえる。この場面において、Aに善意があることでもたらされるものは何かを考える。ここでの善意とは、Kのためという意識である。

一つ目は、善意により、Kを仲間外れにしていたことを隠している、つまり自分はKをだましているのだという認識が薄まっていることが考えられる。Kという「被害者」への善意が存在していることで、Kという「被害者」の立場への認識が薄くなっている。

二つ目は、AがKを仲間外れにしていたことを隠すという自身の行為を、Kを悲しませないための正しい行いだと認識できるということである。「Kが悲しむ」という発言から、Kを傷つける行いをしていたということは分かっている、それを隠すことはKのためであると正当化され、正しい行いだと思込むことができる。

善意がAの周囲にもたらすものは何か

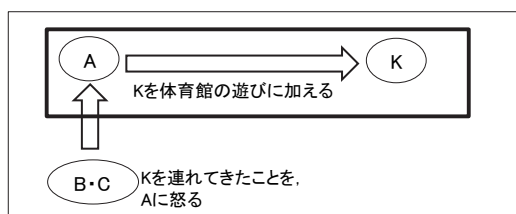
Kへの善意があるとAが位置づけることによって、周囲にも影響があると考えられる。Kを仲間外れにしていたことを隠すというAの行為を、非難しにくい状況になる可能性がある。またAが自身の行為を正当化できると述べたが、周囲もAの行為を正当化することが考えられる。

(6) 第4場面：AがKを体育館の遊びに加える

(6-1) 事例：行為6

AはKを捜し、Bたちが遊んでいる体育館にKを連れて戻る(行為6)。もともと遊んでいた鬼ごっこにKも加わるが、BとCは、AがKを連れてきたことに対し、「なんでK連れてきたの?」とAに怒る。(Figure 6)

Fig. 6 The act in Scenario 4



(6-2) 分析：行為6

第4場面における「良かれと認めてする行為」は、Kを捜し、Bたちもともと遊んでいた体育館にKを連れて戻るといふAの行為である。体育館にKを連れて戻ることによって、KはBたちが遊んでいた鬼ごっこに加わることとなる。「Aたちと一緒に遊びたい。」と言っていたKの望みを達成する行為だといえる。

(6-3) 考察

本事例はここで終了するが、B、Cは、AがKを体育館に連れてきたことに対し怒っており、B、CとAの間に、ここから新たな「問題」が発生していく可能性も考えられる。例えば、休み時間が終わってからB、CとAの間で喧嘩が起き、AがB、Cを傷つけてしまうことや、今後B、CがKではなくAを遊び仲間に入れないという可能性もある。もしもAとB、Cの喧嘩が起きたとしても、その場面だけを切り取らず、「問題」の背後にあるプロセスをみなければ、解決しないことがあるといえる。

総合考察

事例「仲間外れにする」を5つの場面に分け、6つの行為を抽出した。小学4年生女子児童が学校生活場面で「良かれと認めてする行為」をどのような背景文脈で行っているのか分析したが、今後の課題も含め総合考察を行う。

関係性という前提条件

本事例では結果としてKを交えて遊ぶことになったが、第1場面でKが「一緒に遊びたい。」と話しかけてからいくつかの段階を経て遊びに至っている。「遊びたい」と言った相手を仲間に入れるような行為は、一般に、他者の利益となる行動として「向社会的行動」と言われている²。こうした行動は、特に学校生活において多く推進されていると思われるが、本事例のように、関係性が向社会的行動を阻止する可能性があると考えられる。本事例では、友人との仲の良さ、好き嫌いという関係性が向社会的行動の前提条件となったといえる。

行為の動機には善意だけでなく、悪意や欲求も併存する

Kに「やっぱり誰かに聞いて」といふAの行為の動機について検討した。Aはこの行為を別の友達へ

の善意から行ったと説明するが、行為を分析した結果、Aの行為は善意以外の動機も考えられる可能性がある。Bたちとのトラブルを回避したいという欲求や、Kへの意地悪な気持ちなども推測される。行為のきっかけには善意があり、行為の種類によっては欲求や悪意といった動機があるといったように、「良かれと認めてする行為」の動機は、善意や悪意、欲求が併存する場合があると考えられる。

集団の決定権

Kを嫌いなCが、遊び仲間であるA、B、D、Eに、嘘をつくという方法でKを仲間はずれにしようとする提案する行為について、なぜAたちはその提案に反対しなかったのかを検討した。反対しないという行為の動機は複数考えられるが、Kに嘘をついて仲間外れにすることをよしとする状況があったために、反対できなかったのではないかと推測した。複数の人物がいる場面で、自身が間違っていると思っていることがその場において正しいものであったとしても、集団が正とするものが正しくなる可能性がある。多数決の問題ではなく、間違っていると感じていた自身の基準そのものが、集団の力によって変わってしまうといえる。人数が集まった、集団がルールを決定してしまうことは、良い面もあれば悪い面も考えられる。社会においては、集団の基準は表に見えやすいが、小学生ではまた異なると考えられる。小学生の間では、「先生」は絶対的なルールとして存在するはずだと思われるが、高学年になればなるほど、より閉鎖された友人関係において「先生」のルールではなく、自分たちのルールが生まれやすくなり、そしてそれが外から見えにくくなっていくことが考えられる。小学生児童の集団における行動の基準については今後の課題とする。

善意が影響を及ぼすもの

Kに嘘の場所を伝えたとは言わず、場所を変更したがKが見つからなかったと嘘をつく、Aの行為について、Aが行為の動機を善意と位置付けることによってもたらされるものは何かを検討した。行為者が、行為の動機を善意だとすることによって影響されるのは、行為者自身と、行為者の周囲にいる行為の受け手や第三者であると考えられる。

行為者自身には、自身の行為により傷つく被害者が存在する場合、その被害者への意識が薄くなる、

または欠如してしまうということがいえる。誰かのため、という善意が他者を傷つけているかもしれないという加害意識を薄める可能性がある。また行為者自身が、善意による行為だと認識することによって、自身の行為を正しいものとして思いこむことが可能になるということも考えられる。例え初めは、被害者の存在を認識し、行為に迷いがあつたとしても、善意だから正しいという「思いこみ」を繰り返すことで、より強固な行為の意思が作られてしまう可能性を今後の検討課題としたい。

次に善意によって、行為者の周囲にいる受け手や第三者が受ける影響である。行為者の行為の動機に善意があると認識した場合、行為が正しいと思われなくとも、行為者を非難しにくくなってしまうということが考えられる。「他人のためだったから仕方がない」という心情である。非難する以外にも、おかしいと反論することが難しくなるなどが考えられる。また、行為者自身が行為を正当化する傾向があると前述したが、同じように周囲も行為者の行為をあたかも正しいものとして認識してしまう可能性がある。

「問題」となる可能性

本事例は、B、Cが、AがKを体育館に連れてきたことに対し怒るところで終了する。今後B、CとAの間に、新たな「問題」が発生していく可能性について検討した。人が認識した何らかのトラブルは、場面で区切られてしまっていることがある。その場

面、その行為だけから判断してしまうと何が「問題」の本質だったのかわからなくなる可能性がある。背景にある文脈として、他者への善意が行為の動機となっている場合があるとすれば、そこからどのような「問題」が考えられるか。「問題」の構造と合わせて、今後複数の事例から検討する。

謝辞

本研究の調査にご協力いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 法務総合研究所：無差別殺傷事犯に関する研究，研究部報告，50（2013）
- 2) Eisenberg, N., Mussen, P.H. : *The Roots of Prosocial Behavior in Children*, Cambridge University Press. (1989) (菊池章夫・二宮克美（共訳）：思いやり行動の発達心理，金子書房（1991）)
- 3) 松崎学・浜崎隆司：向社会的行動研究の動向，心理学研究，61，193-210（1990）
- 4) 近藤綾・浅田英恵・水口啓吾・杉村伸一郎：幼児の思いやりの嘘と実行機能との関連，幼年教育研究年報，33，41-48（2011）
- 5) 桜井厚：インタビューの社会学，ライフストーリーの聞き方，せりか書房（2002）

指導教員：家政学研究科児童学専攻 岡本吉生教授